

QR Newsletter



第四紀通信

Vol. 20 No.4, 2013



房総半島養老川沿い、市原市田淵付近の上総層群国本層中部の bathyal 環境下に堆積した泥層発達層準。露頭には古地磁気測定個所に札があり（デジタルブック最新第四紀学参照）、更新世前期-中期境界の国際模式地候補の一つとして、本年7月3～5日の第1回国際層序学会（於：リスボン）で紹介された。（解説・撮影：風岡 修）

Vol. 20 No. 4

August 1, 2013

2013年大会案内・・・・・・・・・・2	INQUA 回想録・・・・・・・・・・13
大会プログラム・・・・・・・・・・6	追悼・公募・・・・・・・・・・17
学会賞等受賞者決定・・・・・・・・9	幹事会議事録・・・・・・・・・・18
INQUA2015 名古屋大会通信・・・・10	評議員会議事録・・・・・・・・・・19
INQUA と日本・・・・・・・・・・12	会員消息・・・・・・・・・・20

◆日本第四紀学会総会のお知らせとお願い

8月23日(金)、弘前大学教育学部にて2013年度総会が開催されます。会員各位のご出席をお願いいたします。やむを得ず欠席される場合には、委任状(とじ込みはがきまたはファックス、メール)を必ずご提出ください。8月16日(金)必着でお願いします。

- とじ込みはがきでの委任状提出の場合は、お多数ですが切手を貼り、締切日までに到着するように早めに投函下さい。
- ファックスでの委任状提出の場合は、とじ込みはがきか下記の様式に必要事項を記入し、下記のFAX番号宛にお願いします。

FAX番号：03-5291-2176 日本第四紀学会事務局宛

- メールでの委任状提出の場合は、宛名を「2013年度総会議長」としたうえで、代理人氏名(「議長」でも可)、氏名、所属を明記し、daiyonki(at)shunkosha.com(学会事務局)へ送信して下さい。メールの題名は「第四紀学会メール委任状(2013総会)」として下さい。

総 会 委 任 状

2013年 月 日

日本第四紀学会 2013年度総会議長殿

私は議長(または 氏)を代理人と定め、

日本第四紀学会 2013年度総会における一切の議決権を委任します。

氏名() (署名)

所属()

◆日本第四紀学会 2013年大会案内(第4報)

1. 開催地および日程の概要

会場：弘前大学教育学部(〒036-8560 青森県弘前市文京町1番地) 1階大教室ほか
日程

- 8月22日(木) 一般研究発表(口頭およびポスター)・評議員会
09:30-10:45 一般研究発表(オーラルセッションO-01～O-05) 1階大教室
10:45-11:00 休憩
11:00-12:00 一般研究発表(オーラルセッションO-06～O-09) 1階大教室
12:00-12:45 昼食
12:45-14:00 ポスターセッションコアタイム(1) 1階中教室
14:00-15:30 一般研究発表(オーラルセッションO-10～O-15) 1階大教室
15:30-15:45 休憩
15:45-17:30 一般研究発表(オーラルセッションO-16～O-22) 1階大教室
17:45-19:45 評議員会 2階202教室
- 8月23日(金) 一般研究発表(口頭およびポスター)・総会・表彰状授与式・懇親会
09:00-10:00 一般研究発表(オーラルセッションO-23～O-26) 1階大教室
10:00-10:15 休憩
10:15-11:00 一般研究発表(オーラルセッションO-27～O-29) 1階大教室
11:00-11:55 総会 1階大教室
11:55-12:30 表彰状授与式 1階大教室
12:30-13:30 昼食
13:30-14:45 ポスターセッションコアタイム(2) 1階中教室
14:45-16:00 一般研究発表(オーラルセッションO-30～O-34) 1階大教室
16:00-16:15 休憩
16:15-17:30 一般研究発表(オーラルセッションO-35～O-39) 1階大教室
18:00-20:00 懇親会 弘前大学創立50周年記念会館2階「岩木ホール」

8月24日(土) 公開シンポジウム「考古遺跡からみた津軽の人と自然」
：弘前大学創立50周年記念会館「みちのくホール」

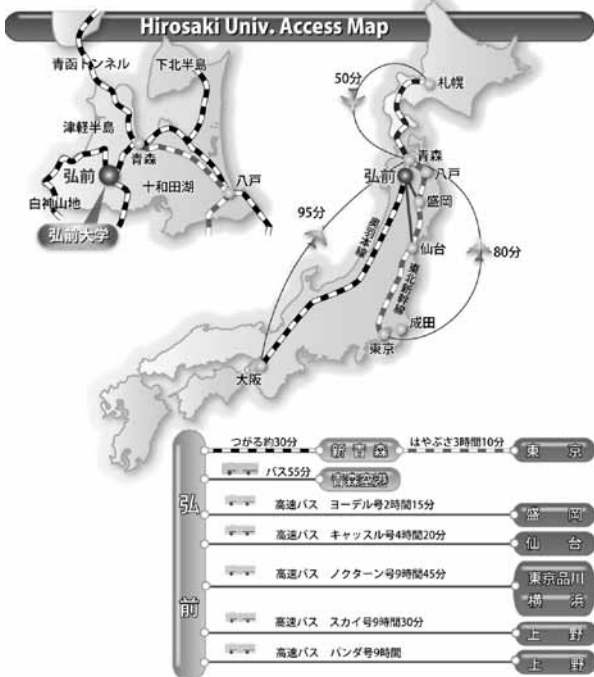
- 09:00- 09:05 趣旨説明 (S-00)
- 09:05- 10:00 S-01 ~ S-02
- 10:00- 10:10 (休憩)
- 10:10- 11:00 S-03 ~ S-04
- 11:00- 11:10 (休憩)
- 11:10- 12:00 S-05 ~ S-06
- 12:00- 12:30 総合討論

2. 会場案内

○弘前大学ウェブサイトの交通アクセス情報 (<http://www.hirosaki-u.ac.jp/access/access.html>)、およびキャンパス案内 (<http://www.hirosaki-u.ac.jp/access/hirosakimap/index.html>) をご参照下さい。

【注意】懇親会会場が大会案内第3報から変更されています。

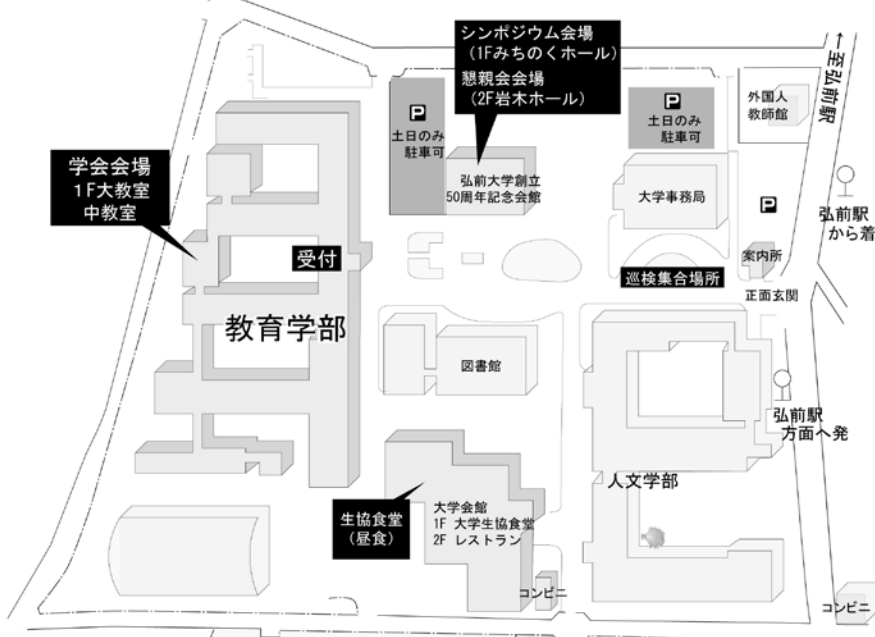
弘前へのアクセス地図



会場周辺地図



会場地図



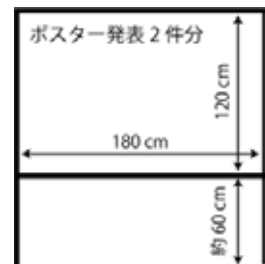
- JR 弘前駅からバスを利用される場合（弘南バスのウェブサイト：<http://konanbus.com/>）駅前【3番】のりばから「小栗山・狼盛線」または「学園町線」に乗車し、「弘前大学前」で下車して下さい。なるべく公共の機関をご利用下さい。
- 宿泊：弘前市内のホテルをご利用ください。宿泊の予約は各自でお願いいたします。

3. 口頭発表要領

- 口頭発表は発表 12 分、質疑 3 分です。
- 会場には Windows (OS:Windows 7) パソコンに接続した液晶プロジェクターを用意します。Adobe Reader 9、Microsoft PowerPoint 2010 を用いた発表が可能です。Mac で作成の方は、あらかじめ Windows パソコンで動作確認をお願いします。
- ファイル名に講演番号をつけたデータファイルを USB メモリー等（ウィルスの感染のないもの）に入れ、会場の担当者までお持ち下さい。初日の午前の方は 09:00～09:30 に、午後の方は 13:30～14:00 に、2 日目午前の方は 08:30～09:00 に、午後の方は 14:15～14:45 に担当者までお持ち下さい（2 日目の方は前日でも結構です）。
- 上記以外のソフト、またはご自分のパソコンを使用される場合には、ご自分のパソコンを持参して、接続して下さい。その際には会場にて事前の動作確認をお願いいたします。
- Mac 使用の方は、コネクタを持参下さい。
- OHP はありません。

4. ポスターセッションの発表要領

- ポスターは大会期間中の 8 月 22 日 11:00～17:30、8 月 23 日 09:30～17:30 まで掲示できます。会場は教育学部 1 階中教室です。
- ポスターセッションコアタイム：8 月 22 日 12:45～14:00（奇数番号）、8 月 23 日 13:30～14:45（偶数番号）をポスターセッション会場での説明時間に設定しています。
- ポスターセッションのショートサマリー発表はありません。
- ポスターのボード面積は 1 題あたり、縦 120 cm（脚部込みの高さ 180 cm）、横 90 cm です。画鋲は使用できません。テープ等は会場で用意します。
- ポスターには発表番号・発表題名・発表者名をタイトルとして明記して下さい。発表番号はプログラムを参照して下さい。
- ポスター会場でのコンピュータの使用や、テープ等で掲示できない重量物等の展示を希望される方は、大会実行委員会事務局・小岩 ([koiwa\(at\)cc.hirosaki-u.ac.jp](mailto:koiwa(at)cc.hirosaki-u.ac.jp)) まで連絡して下さい。



5. 参加費・懇親会申し込み等

- 大会参加費：2,000 円（会員・非会員を問わず。会場受付でお支払い下さい。）ただし、大学院生の会員は 1,500 円、70 歳以上の会員と学部学生、シンポジウム依頼講演者は無料です。
- 講演要旨集：予定価格 2,000 円（会場で直接販売。ただし、発表数等によって価格が若干変動する場合があります。）大会終了後の入手方法は事務局へお問い合わせ下さい。
(株) 春恒社 学会事業部内 日本第四紀学会事務局
E-mail : [daiyonki\(at\)shunkosha.com](mailto:daiyonki(at)shunkosha.com) Tel : 03-5291-6231 Fax : 03-5291-2176
- 懇親会に参加される方は申し込みをお願いいたします。
日 時：8 月 23 日（土）18:00～（予定）
会 場：弘前大学創立 50 周年記念会館 2 階「岩木ホール」
参加費：一般 5,000 円、学生 2,500 円
予 約：8 月 9 日（金）までに E-mail : [jaquahirosaki\(at\)gmail.com](mailto:jaquahirosaki(at)gmail.com) か Fax : 0172-39-3347 で
大会実行委員会事務局・小岩までご連絡下さい。
- 会期中の昼食：大学生協が利用できます。

6. 公開シンポジウム（参加費無料）

- テーマ「考古遺跡からみた津軽の人と自然」
- 日 時：8 月 24 日（土）09:00～12:30
- 場 所：弘前大学創立 50 周年記念会館「みちのくホール」
- 世話人：檜垣大助・小岩直人・亀井 翼（弘前大学）
- 趣 旨：青森県津軽地方には、亀ヶ岡遺跡をはじめとする学術的にも貴重な縄文時代遺跡が多数存在しています。このような地域において人と自然の関係を明らかにすることは、第四紀学においてきわめて重要な課題の一つであると思われます。今回のシンポジウムでは、津軽地方における考古学、および遺跡、遺物を対象とした地形学、地質学の研究成果から、遺跡を通じた人と自然の関係を議論します。

○プログラム

- 09:00- 09:05 趣旨説明
 09:05- 09:35 津軽の縄文時代—亀ヶ岡文化を中心に— 関根達人 (弘前大学)
 09:35- 10:00 東北地方北部の更新世末期・完新世の植生史 安 昭炫 (パレオ・ラボ)
 10:00- 10:10 (休憩)
 10:10- 10:35 津軽の地形形成のテクトニクス 根本直樹 (弘前大学)
 10:35- 11:00 津軽の地質と土器材料 柴 正敏 (弘前大学)
 11:00- 11:10 (休憩)
 11:10- 11:35 津軽平野の地形発達と遺跡の消長 小野映介・片岡香子 (新潟大学)
 11:35- 12:00 縄文遺物を含む近世の破堤堆積物 鎌田耕太郎 (弘前大学)
 12:00- 12:30 総合討論

7. 巡検

○テーマ：「津軽平野とその周辺域の第四紀地形・地質と縄文遺跡」

○日 程：8月25日(日)

○案内者：檜垣大助・小岩直人・亀井 翼

○巡検の概要とスケジュール

- 8:00 弘前大学正面玄関前 出発
 ・鱈ヶ沢町北浮田(海成段丘構成層)
 ・出来島(「最終氷期埋没林」、日本最北のAT)
 ・亀ヶ岡遺跡(概観の観察)
 ・十三湖潮流口付近の食堂にて昼食(しじみラーメンを予定)
 ・五月女菴遺跡(クロスナ層に発達する縄文後期～晩期の遺跡)
 ・小泊半島南西部(活動的な地すべり地形)
 ・青森湾西岸断層帯(車窓観察)

17:00頃 新青森駅

・入内断層付近を通り青森空港へ

17:30頃 青森空港(羽田行き最終便搭乗可能)

18:30頃 弘前大学着

到着時間と巡検場所は、天候および遺跡発掘現場の事情等により変更することがあります。

○募集人員：30名(大型バス使用) 15名未満の場合は中止

○参加費：4,000円(バス代、昼食代、保険料含む)

○申し込み方法：参加希望者は、e-mailにて、氏名・所属・連絡先(住所・電話番号・メールアドレス)を明記し、下記の宛先までお申し込み下さい(締め切り7月31日(水))。

申し込み先：jaquahirosaki(at)gmail.com 大会実行委員事務局・亀井 翼 (Tel:0172-39-3190)

8. 大会実行委員会

実行委員会委員：檜垣大助(実行委員長、弘前大)・鎌田耕太郎(弘前大)・柴 正敏(弘前大)・北村繁(弘前学院大)・亀井 翼(弘前大)・葛西未央(弘前大・院)・小岩直人(弘前大)

連 絡 先：実行委員会事務局長 小岩直人 koiwa(at)cc.hirosaki-u.ac.jp

弘前大学教育学部 自然地理学研究室

〒036-8560 青森県弘前市文京町1番地 Tel/Fax 0172-39-3347

9. プログラム詳細

口頭発表会場：教育学部1階大教室

ポスター会場：教育学部1階中教室

評議員会会場：教育学部2階202教室

懇親会会場：弘前大学創立50周年記念会館2階「岩木ホール」

公開シンポジウム会場：弘前大学創立50周年記念会館「みちのくホール」

大会プログラム

○第1日 2013年8月22日(木) 一般研究発表・評議員会 口頭発表(連名の場合は筆頭者が発表、*印は若手発表賞エントリー)

- 0-01 ~ 05 座長: 鎌田耕太郎
- 0-01 09:30- 09:45 大石雅之*・三輪学央・下司信夫・篠原宏志 ----- 構成粒子と組織解析からみたテフラに含まれる火山ガラスの形成プロセス—霧島火山新燃岳 2011年噴火を例に—
- 0-02 9:45- 10:00 橋本真樹*・村井辰太郎・吉野友美・畠山恵介・香村一夫 ----- 日本海沿岸に位置する湖沼底質中に含まれる球状炭化粒子の分析に基づいた越境大気汚染履歴の検討
- 0-03 10:00- 10:15 白井正明・大村亜希子・伊藤拓馬・丹羽雄一 ----- 熊野トラフ西部の半遠洋性堆積物表層部における過去約100年間の堆積速度
- 0-04 10:15- 10:30 檜垣大助・伊東啓人・高橋明久 ----- 青森県北部小泊半島における海岸沿いの地すべり
- 0-05 10:30- 10:45 佐々木夏来*・清水 整・須貝俊彦 ----- 八幡平における地すべり土塊内の湿原の堆積構造と発達過程
(休憩 10:45- 11:00)
- 0-06 ~ 09 座長: 白井正明
- 0-06 11:00- 11:15 小岩直人・菊地恒佑・葛西未央 ----- 青森県鱒ヶ沢町鳴沢川下流部に認められる歴史時代の津波堆積物
- 0-07 11:15- 11:30 谷川晃一郎*・澤井祐紀・宍倉正展・藤原 治・行谷佑一・松本 弾 ----- 青森県太平洋岸で検出された津波堆積物
- 0-08 11:30- 11:45 北村晃寿・小林小夏・小山真人・小倉一輝・大橋陽子・内田絢也・斉藤亜妃・森 英樹・藤原 治・板坂孝司・宮入陽介 ----- 静岡・清水平野と伊豆半島南部の古地震・古津波の履歴
- 0-09 11:45- 12:00 藤原 治・佐藤善輝・小野映介・市川清士 ----- 浜松平野で発見された過去4000年間の津波堆積物
- …… 12:00- 12:45 昼食
- …… 12:45- 14:00 **ポスターセッション: コアタイム (奇数番号)**
- 0-10 ~ 15 座長: 宮入陽介
- 0-10 14:00- 14:15 北場育子・中川 毅・Erin McClymont・David L. Dettman・兵頭政幸 ----- 大阪湾表層堆積物の花粉組成の変動性を決めるもの—海成堆積物を用いた定量的気候復元の高精度化をめざして—
- 0-11 14:15- 14:30 山田圭太郎*・竹村恵二・加 三千宣・山本正伸・檀原 徹 ----- 別府湾における過去3000年間のテフラ層序
- 0-12 14:30- 14:45 紀藤典夫・布田 愛・白崎雄己・越 宣之・阿部直美子・川上洋二郎・木山博行 --- ----- ユスリカ群集を用いた完新世後期の古気温復元
- 0-13 14:45- 15:00 中村俊夫・高田秀樹・金原正明・西本 寛 ----- 能登半島富山湾岸に位置する真脇遺跡から出土した木柱群の¹⁴C年代編年
- 0-14 15:00- 15:15 一木絵理*・中村俊夫・小林謙一 ----- 千葉県飛ノ台貝塚出土資料の¹⁴C年代と海洋リザーバー効果
- 0-15 15:15- 15:30 金原正明・岡田憲一 ----- 奈良盆地における縄文時代後・晩期のクリ林の形成と時空的分布
(休憩 15:30- 15:45)
- 0-16 ~ 19 座長: 小野映介
- 0-16 15:45- 16:00 久保純子 ----- インド東海岸ゴダバリ・クリシュナデルタにおける遺跡分布と地形(予報)
- 0-17 16:00- 16:15 斎藤文紀・Kakani Nageswara Rao・K.Ch.V. Nagakumar・G. Demudu・N. Basavaiah・A.S. Rajawat・久保純子・Zhen Li ----- インド、ゴダバリデルタの完新世における変遷
- 0-18 16:15- 16:30 木村克己・康 義英・花島裕樹 ----- ボーリングデータ解析に基づく長沼低地の沖積層基底面モデルと浅部地下地質構造
- 0-19 16:30- 16:45 清水 整*・須貝俊彦・佐藤明夫・近藤玲介・遠藤邦彦 ----- カザフスタン・イリ川中流域の地形形成面の編年と地形発達史
- 0-20 ~ 22 座長: 須貝俊彦
- 0-20 16:45- 17:00 千葉 崇*・長井雅史・小野 昭 ----- 完新世における広原湿原の形成過程と粗粒堆積物流入イベント
- 0-21 17:00- 17:15 植木岳雪・杉原保幸 ----- 長野県北部、居谷里湿原周辺における最終氷期以降の地形発達史
- 0-22 17:15- 17:30 中村由克 ----- チャート製石器石材の原産地と採集地の推定法
- …… 17:45- 19:45 **評議員会**

○第2日 2013年8月23日(金) 一般研究発表・総会・懇親会
口頭発表

- 0-23 ~ 26 座長：田力正好
- 0-23 09:00- 09:15 鎌田耕太郎 ----- 十和田八戸イグニブライト直上にみられるチャンネル埋積型ラハール堆積物
- 0-24 09:15- 09:30 長橋良隆・廣瀬孝太郎・中澤なおみ ----- 福島県猪苗代湖の湖底堆積物 (INW2012) コア試料の岩相層序とバーコード様堆積物の化学的特徴
- 0-25 09:30- 09:45 高橋智佳史*・三浦知督・鷹澤好博 ----- 光励起ルミネッセンスによる活断層ガウジの年代測定法
- 0-26 09:45- 10:00 奥村晃史・竹本仁美・Javed N. Malik・Sahoo Santiswarup・Sambit P. Naik・Afzal Khan・加藤照之 ----- インドヒマラヤ前縁における古地震・地殻変動調査
(休憩 10:00- 10:15)
- 0-27 ~ 29 座長：三浦英樹
- 0-27 10:15- 10:30 中川 毅・水月湖 2006年コアプロジェクトメンバー一同 ----- 水月湖の年縞堆積物から得られた、過去5万2800年分の¹⁴C較正データセットとその精度
- 0-28 10:30- 10:45 須貝俊彦・遠藤 謙・石原武志・松本 良 ----- 日本海上越沖 MD179-3304 コアから復元された過去10万年間の環境変動と飛騨山脈における氷河消長との関わり
- 0-29 10:45- 11:00 菅谷真奈美*・奥田昌明・岡田 誠 ----- 下北半島沖 C9001C コアの花粉分析による過去12万年間のアジアモンスーン変動復元
- …… 11:00- 11:55 **総会**
- …… 11:55- 12:30 **表彰状授与式**
- …… 12:30- 13:30 昼食 (13:00-13:30に1階大教室にてINQUA名古屋大会組織委員会の進捗報告があります)
- …… 13:30- 14:45 **ポスターセッション：コアタイム (偶数番号)**
- 0-30 ~ 34 座長：中川 毅
- 0-30 14:45- 15:00 三浦英樹・前杵英明・奥野淳一 ----- 西グリーンランド、シシミウおよびカンガルスファック周辺の地形発達史と最終氷期最盛期のグリーンランド氷床復元の問題点
- 0-31 15:00- 15:15 阿部彩子・齋藤冬樹・川村賢二・M. Raymo・奥野淳一・高橋邦夫・H. Blatter ----- 10万年周期の氷期間氷期サイクルと氷床-気候系の多重性
- 0-32 15:15- 15:30 川村賢二・青木周司・中澤高浩・鈴木香寿恵・阿部彩子 ----- 南極ドームふじ氷床コアにより正確に年代付けされた過去70万年間の気候記録
- 0-33 15:30- 15:45 大西耕造・西坂直樹・辻 智大・柳田 誠・隈元 崇 ----- 四国西部における火山灰の層厚に関する確率論的評価
- 0-34 15:45- 16:00 菅沼悠介・岡田 誠・堀江憲路・海田博司・竹原真美・野崎 篤・宇都宮正志 ----- 二次イオン質量分析計 (SHRIMP) を用いた広域テフラの直接年代測定に基づく地磁気逆転境界の高精度年代決定
(休憩 16:00- 16:15)
- 0-35 ~ 39 座長：加藤茂弘
- 0-35 16:15- 16:30 兵頭政幸・北場育子 ----- 更新世前期・中期境界の磁気-気候層序
- 0-36 16:30- 16:45 鈴木毅彦・笠原天生・植村杏太・村田昌則・青木 拓・斎藤はるか・川島眞一・川合将文 ----- テフラに基づく武蔵野台地西部における第四紀地下地質層序：昭島・八王子・立川・武蔵村山・武蔵村山榎・東大和コアによる検討
- 0-37 16:45- 17:00 中里裕臣・七山 太 ----- 上総層群笠森層のテフラ層序とMIS年代
- 0-38 17:00- 17:15 田村糸子・山崎晴雄 ----- 中央日本に分布する新第三紀/第四紀境界層準のテフラ編年-南関東と東海・古琵琶湖層群とのテフラ対比を中心として-
- 0-39 17:15- 17:30 森 勇一・宇佐美 徹・齋藤めぐみ ----- 三重県の鮮新・更新統東海層群から得られた海生珪藻化石とmarine spill イベント
- …… 18:00- 20:00 **懇親会**

ポスター発表（会場：教育学部中教室）* 印は若手発表賞エントリー

コアタイム 奇数番号：8月22日（木）12:45-14:00 偶数番号：8月23日（金）13:30-14:45

- P-1 宮入陽介*・横山祐典・平林頌子・山根雅子 ----- シングルステージ加速器質量分析計を用いた高精度放射性炭素年代測定システムの構築
- P-2 中沢祐一* ----- 黒曜石水和層法における計測値の評価
- P-3 高田将志 ----- 環境指標としてみた植物ケイ酸体の酸素同位体比
- P-4 江連靖英*・須貝俊彦・松四雄騎・松崎浩之 ----- 木曾山脈大関カールにおける宇宙線生成核種¹⁰Be濃度分布から推定される積雪による宇宙線遮蔽効果
- P-5 長澤重信*・北川浩之・林田 明・竹村恵二 ----- 琵琶湖 BIW08B コア堆積物の炭酸塩の含有量と同位体
- P-6 初宿成彦 ----- 甲虫化石を用いた MCR 法による古気候解析の日本における適用
- P-7 三浦知督*・高橋智佳史・鷹澤好博 ----- ルミネッセンス法による活断層ガウジの熱影響分析
- P-8 近藤玲介*・塚本すみ子・坂本竜彦 ----- pIRIR 年代測定による北海道北部における海成段丘編年の試み
- P-9 松本建速・市川慎太郎・中村利廣・三宅 裕 ----- トルコ共和国サラット・ジャーミー・ヤヌ遺跡出土土器新石器時代土器の化学的胎土分析研究
- P-10 關 健太郎・山舘 順 ----- 北海道南部出土中世古銭の特性分析
- P-11 佐々木榮一 ----- 秋田県・岩手県内の縄文時代アスファルト遺物のバイオマーカー分析
- P-12 金原正明・金原裕美子・金原美奈子 ----- 奈良盆地における縄文時代後・晩期の植生分布と変遷
- P-13 亀井 翼*・小岩直人・上條信彦 ----- 秋田県南秋田郡五城目町中山遺跡の自然形成過程
- P-14 林崎 涼*・白井正明 ----- アルカリ長石粒子の OSL 年代測定法を用いた津波堆積物の運搬・堆積過程の推定
- P-15 後藤憲央・柳田 誠・池田倫治・辻 智大・小林修二・高橋鉄一・秋葉文雄・松島義章 ----- 四国北西部伊予灘沿岸域における津波堆積物調査（速報）
- P-16 北田奈緒子・竹村恵二・井上直人・三田村宗樹・伊藤浩子 ----- ボーリング調査とボーリングデータベースから見た和歌山平野の特徴
- P-17 鎌田耕太郎 ----- 高起伏環境における石礫型土石流による岩屑移動の特徴：津軽十二湖地域での産状から
- P-18 丹羽雄一*・白井正明・大村亜希子・宇津川喬子・渡辺万葉・林崎 涼 ----- 安定した塩分環境における混濁水の電気伝導度と孔隙率の関係－熊野灘沖半遠洋性堆積物と天竜川佐久間ダム湖底堆積物の例－
- P-19 豊田和弘・米延仁志 ----- 小川原湖コア堆積物中の Sr 同位体比－古塩分濃度の復元指標の妥当性の検討
- P-20 葛西未央*・小岩直人 ----- 珪藻分析に基づく完新世中期以降の十三湖の湖水環境復元
- P-21 山市 剛*・宮内崇裕・石村大輔・早瀬亮介 ----- 珪藻分析に基づく三陸海岸久慈川低地の完新世古環境復元
- P-22 里口保文・芳賀裕樹・林 竜馬・井内美郎 ----- 琵琶湖東岸地域の湖底で 100 年前に何がおこったのか
- P-23 永安浩一*・公文富士夫 ----- 琵琶湖 BIW08-B コアに含まれる過去 2.5 万年間の珪藻化石群集の詳細変動解析
- P-24 中川 毅・水月湖 2006 年コアプロジェクトメンバー一同 ----- 水月湖クロノロジーに基づいた、いくつかの広域テフラの精密な年代決定
- P-25 石村大輔*・山田圭太郎・宮内崇裕・平川一臣 ----- 三陸海岸に分布する完新世の広域テフラ
- P-26 鈴木正章・遠藤邦彦・横田彰宏・小林克也・藤根 久・パレオ・ラボ年代測定グループ ----- 樽前 1739 年噴火 Ta-a 火砕流は白老低地に到達したか？
- P-27 西連地信男・大井信三 ----- 地層はぎ取り標本の教材から見た鬼界葛原テフラ (K-Tz) の堆積状態
- P-28 加藤茂弘・石村大輔・檀原 徹・岩野英樹・平田岳史・岡田篤正・竹村恵二 ----- 気山層最下部に挟在する美浜テフラの LA-ICP-MS-FT 年代と大山火山起源のテフラとの対比
- P-29 植村杏太*・横田彰宏 ----- 関東平野西縁東松山周辺における段丘面区分と指標テフラの再検討
- P-30 村田昌則・鈴木毅彦 ----- 東北日本弧南部会津地域における第四紀前半のカルデラ噴火史
- P-31 田力正好・水本匡起・松田時彦 ----- 横ずれ活断層沿いの河谷の偏形度－中部山岳地帯の例
- P-32 竹村恵二・北田奈緒子・井上直人・三田村宗樹 ----- 大阪市内を中心とした平野部における上町断層の長期評価について
- P-33 井上直人 ----- 重力異常および磁気異常データの 2 次元ジョイントインバージョンからみた大阪南部の地下構造
- P-34 八木雅俊*・坂本 泉・横山由香・滝野義幸・古畑卓真・原田義信・根元謙次・藤巻三樹雄・岡林行信 ----- 布引山地東縁断層帯海域部における高分解能シングルチャンネル音波探査

○第3日 2013年8月24日(土) 公開シンポジウム「考古遺跡からみた津軽の人と自然」

主旨説明 09:00- 09:05

- S-1 09:05- 09:35 関根達人 ----- 津軽の縄文時代—亀ヶ岡文化を中心に—
 S-2 09:35- 10:00 安 昭炫 ----- 東北地方北部の更新世末期・完新世の植生史
 (休憩 10:00- 10:10)
 S-3 10:10- 10:35 根本直樹 ----- 津軽半島における新第三紀以降のテクトニクス
 S-4 10:35- 11:00 柴 正敏 ----- 津軽の地質と土器材料
 (休憩 11:00- 11:10)
 S-5 11:10- 11:35 小野映介・片岡香子 ----- 津軽平野の地形発達と遺跡の消長
 S-6 11:35- 12:00 鎌田耕太郎 ----- 縄文遺物を含む近世の破堤堆積物
 12:00- 12:30 総合討論

◆ 2013年日本第四紀学会学会賞・学術賞、論文賞・奨励賞受賞者決定

日本第四紀学会では、学会賞、学術賞、功労賞、論文賞、奨励賞を設け、顕彰を行っております。これらのうち、2013年の学会賞、学術賞、論文賞、奨励賞の選考が行われ、受賞者が決定されました。

学会賞は第四紀学の発展に貢献した顕著な業績を有し、また日本第四紀学会の活動に著しい貢献があった正会員に授与される、学会における最高の賞です。また学術賞は第四紀学に貢献した優れた学術業績をあげた正会員に授与されます。会員の皆様から推薦募集を行い、1月31日をもって締め切り、学会賞の推薦3件、学術賞の推薦3件がありました。学会賞受賞者選考委員会(百原 新委員長、池田安隆・河村善也・佐藤宏之・米田 稔各委員)によって最終候補者が推薦され、5月23日に行われた評議員会において、下記のとおり受賞者が決定されました。

- 日本第四紀学会学会賞：岩田修二会員
受賞件名：「山岳氷河地形と堆積物および山と人間活動に関する一連の研究」
- 日本第四紀学会学会賞：海津正倫会員
受賞件名：「沖積低地と自然環境変化に関する一連の研究」
- 日本第四紀学会学会賞：陶野郁雄会員
受賞件名：「自然災害に対する第四紀学の応用的研究への一連の貢献」
- 日本第四紀学会学術賞：久保純子会員
受賞件名：「河川地形環境の変遷に関する研究とその多面的な応用」
- 日本第四紀学会学術賞：中川 毅会員
受賞件名：「後期更新世における古気候学、年代学の高度化への貢献」

論文賞及び奨励賞は、会誌「第四紀研究」に掲載された第四紀学の発展や進歩に貢献する優れた論文を公表した会員を含む著者に授与されるもので、とくに奨励賞は若手研究者(会員)の育成と研究奨励に寄与することを目的としています。論文賞受賞者選考委員会(卜部厚志委員長、青木賢人、五十嵐八枝子、奥田昌明、高橋啓一各委員)によって両賞の最終候補者及び論文が推薦され、5月23日に行われた評議員会において、下記のとおり、受賞者が決定されました。

- 日本第四紀学会論文賞：小野映介会員・片岡香子会員・海津正倫会員・里口保文会員
受賞論文：論説 小野映介・片岡香子・海津正倫・里口保文、十和田火山AD915噴火後のラハールが及ぼした津軽平野中部の堆積環境への影響。51巻6号、317-330頁。
- 日本第四紀学会論文賞：五十嵐八枝子会員・成瀬敏郎会員・矢田貝真一会員・檀原 徹会員
受賞論文：論説 五十嵐八枝子・成瀬敏郎・矢田貝真一・檀原 徹、北部北海道の剣淵盆地におけるMIS7以降の植生と気候の変遷史—特にMIS6/5eとMIS2/1について。51巻3号、175-191頁。
- 日本第四紀学会奨励賞：竹本仁美会員
受賞対象論文：論説 竹本仁美・奥村晃史、長野県神城盆地の局所的な地形変化に対する完新世の花粉化石群集の応答。51巻1号、21-33頁。
- 日本第四紀学会奨励賞：千葉 崇会員
受賞対象論文：論説 千葉 崇・遠藤邦彦・増渕和夫、潮間帯における珪藻殻のサイズ分布と珪藻遺骸の堆積過程。50巻6号、279-293頁。

各受賞者の表彰式は、8月23日の日本第四紀学会大会総会後に行われます。受賞理由等の詳細は、総会において報告されると共に次号の第四紀通信にてお伝えします。また学会賞・学術賞受賞者による記念講演会を計画中です。

◆ INQUA 2015 名古屋大会通信 (2)

国際第四紀学連合第 19 回大会組織委員会

国際第四紀学連合第 19 回大会 (2015 INQUA Congress - Nagoya) の開催まで 2 年になりました。前回の報告以降、INQUA 執行部とのやりとりを経て、おおよそのスケジュール等が決まりましたので、その後の進捗と合わせて報告致します。

1. 大会の概要

国際第四紀学連合第 19 回大会 (2015 INQUA Congress - Nagoya) は、下記の内容で開催します。

- ・期 日：2015 年 7 月 27 日 (月) ～ 8 月 2 日 (日)
- ・会 場：名古屋国際会議場 <http://www.nagoya-congress-center.jp>
- ・テーマ：Quaternary Perspectives on Climate Change, Natural Hazards, and Civilization
「第四紀学からみた気候変動、自然災害と文明」
- ・主要サブテーマ：
 1. Quaternary science for natural risk mitigation
 2. Understanding and quantifying past changes in the Earth to improve projections of future climate, sea-level, and environmental changes
 3. Dynamics of the human and nature interaction
 4. Developing and integrating new technologies for Quaternary chronology and stratigraphy.
- ・巡 検：前回のベルン大会では 1 日巡検が 23 コース、合計で大会参加者の約 3 分の 1 近い 600 ～ 650 名が参加しました。すべて満席であったことを考えると、1 日巡検の希望者は更に多かったことが予想されます。これを受けて名古屋大会でも、現在、プレとポスト巡検で 16 コース、1 日巡検 10 コースを準備中です。1 日巡検については、大会の直前・直後の 1 日と中日の 1 日を有効に使って、できるだけ多くの巡検を用意したいと思っています。地質、地理、考古、動物・植物、化石、遺跡、博物館、等々、まだ追加の巡検を受け付けていますので、中部・近畿圏で紹介したい地域・地点がありましたら、至急事務局までご一報ください。

2. 科学セッションと INQUA の委員会

INQUA 大会では 100 弱のセッションが設けられ、その多くが INQUA の委員会に関係しています。INQUA には下記の 5 つの委員会があり (<http://www.inqua.org/commissions.html>)、INQUA の大会と大会の間の 4 年間は、各委員会の International Focus Groups や Commission Projects による活動が行われています。個々の活動については、上記のウェブページをご覧ください。

1. CMP: Coastal and Marine Processes 「沿岸・海洋プロセス研究委員会」
2. PALCOMM: Palaeoclimate 「古気候研究委員会」
3. HaBCom: Humans and the Biosphere 「人類・生物圏研究委員会」
4. SACCOM: Stratigraphy and Chronology 「層序・年代学研究委員会」
5. TERPRO: Terrestrial Processes, Deposits and History 「陸域のプロセス・堆積物・地史研究委員会」

セッションの募集は、これら 5 つの委員会と組織委員会を通じて行われます。2013 年末に募集があり、2014 年 1 月末に各委員会でのとりまとめ、2014 年 2 月末～3 月に開催される INQUA の執行委員会で、セッション全体のとりまとめが行われます。名古屋大会の国際科学委員会の委員長は Alan Chivas 前 INQUA 会長、委員は上記の 5 つの委員会の委員長と組織委員会から科学プログラム委員会の小野 昭、横山祐典、正副委員長と若干名です。「第四紀」を幅広く捉えて頂き、国内外の関連する分野の方々と、できるだけ多くのセッション提案をして頂けますようお願い致します。セッション受付の窓口は、上記の 5 つの委員会と日本の組織委員会になります。

3. 日本学術会議との共同主催と関連学協会との共催等

日本学術会議の平成 27 年度 (2015) 共同主催の申請を 2012 年 11 月に行い、書類審査、ヒアリング後、2013 年 3 月に平成 27 年度共同主催国際会議候補として決定したとの連絡を頂きました。現在最終的な書類一式を 5 月に提出し終えたところです。

INQUA に対応する日本における組織は、1950 年 11 月 17 日に日本学術会議の地質学研究連絡委員会に第四紀小委員会の設置が認められてからになります。翌年の 1951 年 12 月号の地質学雑誌の裏表紙裏に「地質学研究連絡委員会第四紀小委員会の結成」として以下のように広告し、第四紀に関係する幅広い分野からの参加を募っています。「当分地質学者が中心となるが、地理学・地形学・気候学・気象学・海洋学・陸水学・地球物理学・地球化学・生物学・生物地理学・火山学・人類学・考古学等各方面の人達の参加も望んでいる」。1952 年に正式に小委員会が発足しますが、それから 60 年余を経て、INQUA の大会が日本で開催されることになります。小委員会は、その後日本第四紀学会の設立と第四紀研連へと発展してゆきますが、今回の INQUA 大会は、上記の広告にあるように、国内の第四紀に関係する幅広い分野の研究者が、国内や海外の研究者と交流する、またその成果を発信する又とない機会です。日本学術会議の INQUA 分科会と日本第四紀学会は会議の母体であると共に、そのお世話をする任にあります。このため、関連する学協会にセッション等での共催をお願いしており、これまでに 30 を超える学協会から共催・

後援などの回答を頂いています。共催や後援、協賛して頂ける関連する学協会や団体、機関がありましたら、事務局までご連絡頂けますようお願い致します。皆様の積極的な参加をお願い致します。

4. 募金活動

2012年11月に日本政府観光局（JNTO）に、INQUA大会への寄附が「寄附の形態をとり非課税扱い」になるように申請を行い、12月に採択になりました。これにより、INQUA大会への寄附が、JNTOを経由することになりますが、非課税扱いになります。

この寄附形式を用いて、2013年4月から企業、団体等に依頼を始めています。ご協力頂ける企業、団体などをご存知でしたら、事務局までご連絡頂けますようお願い致します。また、個人、会員の皆様にも、募金のお願いを今後行う予定ですので、ご協力頂けますようお願い致します。

5. 組織委員会の新委員会

IGBP-PAGESや国際対応に関する委員会を設置することにしました。

PAGES・国際対応委員会 横山祐典委員長

6. ホームページの開設

INQUA名古屋大会のホームページが開設されました。URLは以下の通りです。これから、逐次充実させてゆきたいと思っておりますので、ご意見などありましたら、事務局までお願い致します。

<http://inqua2015.jp>

INQUA執行部からは、facebookやTwitterの開設の要望が届いています。登録開始までには、対応する予定です。

7. 今後の予定

名古屋大会に向けてのスケジュールの概要は以下の通りです。

2013年11～12月：セッション募集開始（各委員会及び組織委員会経由）

2014年1月末頃：セッション締め切り

2014年2～3月上旬：INQUA執行委員会までにセッション案を確定、基調講演案をINQUA執行委員会で検討

2014年3～4月：必要に応じて追加セッション募集

2014年5～6月：最終セッション確定

2014年7月：登録、発表、巡検申し込み開始

2014年8月：日本第四紀学会大会（東大柏キャンパス）

2014年12月10日：参加助成締め切り

2014年12月末：口頭発表申し込み締め切り

2015年2月上旬：口頭発表受理通知

2015年2月28日：早期参加登録締切

2015年3～4月：口頭発表プログラム作成

2015年4月30日（見込）：ポスター発表アブストラクト締切

2015年5月末（見込）：ポスター発表受理通知

2015年7月27日～8月2日：2015 INQUA名古屋大会

8. 連絡先

2015 INQUA大会に向けて、ご質問、ご意見などありましたら、事務局まで連絡して頂けますようお願い致します。事務局（2015inqua-sec-ml(at)aist.go.jp）

◆第四紀小委員会、第四紀研究連絡委員会の資料を探しています

産業技術総合研究所 斎藤文紀

名古屋国際会議場で2015年の夏に国際第四紀学連合（INQUA）の大会が初めて日本で開催するのに際し、日本におけるINQUA対応の歴史に関する資料を探しています。日本学術会議の地質学研究連絡委員会に1950年11月17日に第四紀小委員会が設けられました。更に日本学術会議第5期において、1960年1月に第四紀研究連絡委員会が新設されます。それ以降、INQUA対応の委員会が継続して存続しており、現在は、日本学術会議の国際対応分科会のINQUA分科会がその任を担っています。1956年の日本第四紀学会の設立に際し、第四紀小委員会は矢部長克委員長の下、15名の委員からなる新生の小委員会となります。この時のメンバー構成に関する資料を探しています。また第四紀研究連絡委員会が設置されて以降、第6期（1963-1966）の研連委員構成に関する資料も探しています。多田文男委員長、宮地伝三郎（会員）、渡辺 光（会員）、以上の3名が委員であったことは分かっていますが他の委員構成がわかりません。以上の情報をお持ちの方は、第19回第四紀国際第四紀学連合大会組織委員会までご一報頂けると幸いです。

連絡先：〒305-8567 つくば市東1-1-1 中央第7

産業技術総合研究所 地質情報研究部門 斎藤文紀

メール：yoshiki.saito(at)aist.go.jp

◆ INQUA と日本 (1)

産業技術総合研究所 斎藤文紀

国際第四紀学連合 (International Union for Quaternary Research: INQUA) は 1928 年に創立し、85 年に及ぶ歴史をもつ。2015 年に開催予定の名古屋大会は第 19 回大会 (Congress) になる。INQUA の創立頃の歴史については、Smalley (2011) ほかに詳しく報告されているので、概略を紹介する。

デンマークの地質研究所 (1888 年創立) の創立 40 周年記念国際会議が 1928 年 6 月 17 ~ 30 日にコペンハーゲンで開催され、17 ケ国から 102 人が参加した。この会議の中でポーランド代表团によりヨーロッパの第四紀を研究するための組織 (Association pour l' etude du Quaternaire Europeen: Association on the study of the Quaternary period in Europe) の設立が提案され、6 月 28 日に採択された。オーストリア、ベルギー、チェコスロバキア、デンマーク、フィンランド、フランス、ドイツ、英国、オランダ、ノルウェー、ポーランド、ソ連、スペイン、スウェーデンの 14 ケ国が創立発起国として記されている。これが現在の INQUA の創立で、1928 年 6 月 28 日が INQUA の創立日となっている。会議では、ヨーロッパの 16 ケ国から 95 人の参加者がこの設立提案にサインしている (上記にイタリアとハンガリーが追加)。

1929 年に南アフリカの Pretoria で開催された第 15 回万国地質学会議においてヨーロッパ第四紀研究学会 (ASQUE) の成立が承認され、第 2 回 ASQUE 会議が 1932 年にソ連のレニングラードで開催される。この時は INQUA ではなく、ASQUE の名称が用いられている。更に 1933 年に米国ワシントンで開催された第 16 回万国地質学会議において世界規模に改変することが承認される。これを受けて、名称も INQUA (International Association on Quaternary Research) と変更し、第 3 回国際第四紀学会議 (III International Quaternary Conference) が、1936 年にオーストリアのウィーンで開催される。この会議には、ヨーロッパ以外から、米国、パレスチナからの参加も含めて、187 名が参加する。また、会議へは参加していないが、INQUA への参加を希望した、メキシコ、アルゼンチン、トルコ、日本、蘭領東インド (今のインドネシア) と上記の 2 ケ国及び、ヨーロッパのなど 23 ケ国 (ドイツ、英国、オーストリア、ベルギー、ブルガリア、デンマーク、スペイン、エストニア、フィンランド、フランス、ギリシャ、オランダ、ハンガリー、イタリア、アイルランド、ノルウェー、ポーランド、チェコスロバキア、ルーマニア、スウェーデン、スイス、ソ連、ユーゴスラビア) を加えて 30 ケ国、約 300 名近くが、INQUA に登録されることになり、名実共に国際的な組織となった。第 4 回大会は、1937 年、1940 年、1942 年、また戦後の 1949 年と開催を試みたが成功せず、やっとイタリアが受諾し、1953 年にローマとピサで開催される (高

井、1958)。第 4 回大会から、Conference から Congress となり、日本は初めて正式代表である高井冬二東京大学教授を送り、組織的に活動するようになる。現在の INQUA の名称 (International Union for Quaternary Research) は、第 7 回 1965 年の米国ボルダー大会からで、現在に至っている。

1936 年の第 3 回大会については、日本からの参加の記述が杉村・高井 (1952)、高井 (1958) で 2 名と記載されており、誰が参加したかは不明であった。また、松井ほか (1976) などでは、INQUA の公式記録に残されていないことから日本人の参加者は無かったとしている。第 3 回会議の公式記録 (Göttinger, 1938) を入手し、確認したところ、Nakamura S. として第 3 回 INQUA 会合及び第 4 回 INQUA 会合に向けての日本代表、INQUA メンバーリストに記載されていた。しかし、参加者リストには記載されていない。また、日本からの登録は、S. Nakamura, Prof. Univ., Tokio: Kyoto, Geol. Inst. Imp. Univ. と 2 行にわたっており、メンバーリストにはこれら 2 つが記載されていることから、2 名の参加と読み取られたようである。これは京都大学の中村新太郎教授を指すと考えられるが、Tokio とあることから中村氏が東京大学も登録機関として申請したのか、単に連絡先に東京の住所を用いたのかは不明である。中村新太郎氏は、1941 年 5 月に京都大学を退官後、1941 年 12 月 8 日に亡くなられており (松下、1983)、この情報が埋もれてしまったのであろう。2 年後の 1938 年に正式報告書が出版され (Göttinger, 1938)、日本からの参加は無かったが、この出版物は日本へも郵送されたい。1956 年暮れに

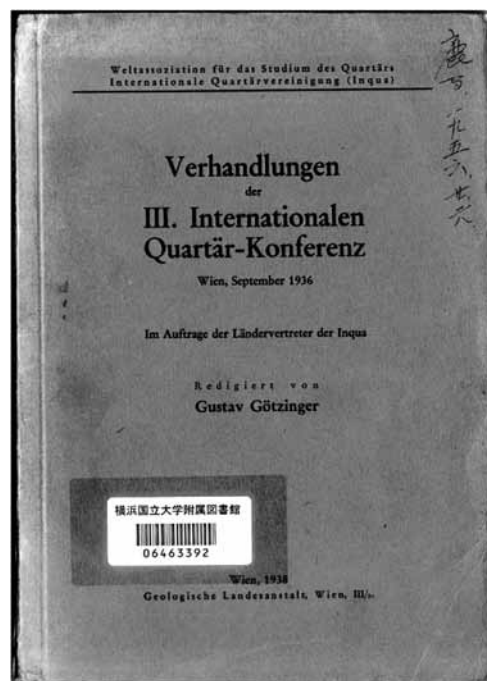


図 1 第 3 回 INQUA 大会の正式報告書 (Göttinger, G. (ed.) (1938) 横浜国立大学蔵書。

鹿間時夫横浜国立大学教授がこの本を入手している(図1)。裏表紙左上には3,000と書かれていることから古本屋で購入したと思われる。この貴重な資料である第3回INQUA大会の正式出版物は、日本へ郵送された後、戦中戦後の混乱の中で、古本屋に流れ、1957年9月の第5回INQUA大会に鹿間氏が日本代表で参加する前に購入し、現在、横浜国大の高井・鹿間文庫に収蔵されている。

Göttinger, G. (ed.) (1938) Verhandlungen der III. Internationale Quartär - Konferenz, Wien, September 1936. Im Auftrage der Landervertreter der Inqua. Weltassoziation für das Studium des Quartärs, Internationale Quartärvereinigung (Inqua). Geologische Landesanstalt, Wien, III/2, 393p.

松井 健・杉村 新・渡辺直経(1977)日本第四紀学会史. 日本第四紀学会編「日本の第四紀研究: その発展と現状」1-9, 東京大学出版会.

松下 進(1983)初期の京都大学理学部地質学鉱物学教室と月刊雑誌「地球」について. 地学雑誌, 92, 265-271.

Smalley, I. (2011) Notes for a history of INQUA - the International Union for Quaternary Research (Association pour l' etude du Quaternaire, Internationale Quartarvereinigung, etc) . Loess Letter 65, 1-19.

杉村 新・高井冬二(1952)本小委員会の結成された経過. INQUA 日本支部連絡紙, No. 1, 2-3.

高井冬二(1958) Fourth International Congress, INQUA (1953) について. 第四紀研究, 1, 64-67.

◆ INQUA 回想録

INQUA 大会に参加して 一回想

太田陽子 (国立台湾大学地質科学研究所特別招聘教授)

1. はじめに

私が初めてINQUA大会に参加したのは1973年、それから77、82、87、91、95、99、2003、2007、2011と40年にわたる計10回のINQUA大会に参加した。これらのすべてに参加した人はずいぶん少なくなったと思う。この原稿を依頼されたのを契機に過去の会議で感じたことなどを振り返ってみたい。まったく自由に書いてよいということで、個人的な追想になっていることを御許しいただきたい。目下在外中なので過去の資料が手元になく、不正確の点があり、写真もない。会議の内容、研究委員会の活動などの詳しい正確な記録は会議の都度に第四紀研究(または第四紀通信)に掲載されているので、ここにはそういう正式な記録には出ていない個人的な経験、感想を述べる。

この文章を書きはじめ、いくつかのINQUAの大会や会議前後の巡検で一緒した方々の何人かすでに世を去られたことに改めて追悼の気持ちに駆られる。とくに私にとっての最初に参加したニュージーランドでの会議や、会議前の巡検で一緒になり、国際会議に不慣れだった私をいたわってくださった吉川虎雄さん、貝塚爽平さん、会議後の巡検で一緒になり、その後もウェリントン付近をご案内した藤田和夫さん、1977年以来INQUAやIGCPの会議でしばしば一緒だった米倉伸之さんなど。米倉さんとはカナダでの会議前の巡検のある晩、夜遅くまで日本第四紀学会編集の第四紀地図の解説を一緒に書いていたことを思い出す。

2. 回想

1973年:初めての国外での国際会議の参加であった。ちょうど文部省在外研究員としてニュージーランド滞在中であった私は、この会議に参加するとともに会議や巡検準備の状況を目の当たりにみることができた。大会は南島のクライストチャーチで行われたが、多くの準備は私が在籍していた首府ウェリントン近郊の地質調査所(現在の地質核科学研究所)で行われた。人口わずか300万の国

で、所員が決して多くはない地質調査所の総力をあげての国際会議の実施だった。だから、だいぶ前に日本でINQUA大会の実施を企画、計画した時、人手が足りないことを理由に後ろ向きの発言があった時に、つい「NZでさえもできたのに」といいたくなった。私は副所長のサゲイト Pat Suggate(第四紀編年や活構造の研究者として著名)、地殻変動研究室をたちあげたレンセン Gerald Lensen(この方も故人となられた)の全面的なサポートのもとで地質調査所で仕事をしていたので、巡検の準備の調査に何回か誘っていただいた。この時に同伴させてもらったことは、ニュージーランドの第四紀編年、地殻変動の理解に本当にありがたかった。

この会議のためにニュージーランド地質調査所により北島、南島の2枚の100万分の1の第四紀地図が編集され、参加者に配布された。この図は、第四紀層や活構造の分布に加えて、挿入図として編年や変形の模式地となる例が多数加わっている。これは大会前の巡検直前に完成し、印刷所から配達されたばかりのまだ湿っている地図を渡されたのが記憶に新しい。この図は、後に日本第四紀学会で第四紀地図の作成にあたってきわめて参考になった。この会議ではじめて直接知り合った研究者とはその後も長く交流するようになった(たとえば地形学者として著名なブルーム Art Bloom)。ニュージーランド滞在とINQUA大会への参加が私の歴史での国際化のはじまりである。

1977年:一度この国際会議に出席すると、次の会議に躊躇せずに参加ができるようになる。イギリスのバーミンガムでの会議にもすぐ参加を決めた。当時は今と違ってEメールはもちろん、ファックスでさえも限られていたから会議や巡検の知らせに何かと不都合があった。私は会議前のスコットランドへの巡検に申し込んであったが、その集合場所が直前までわからなかった。ロンドンについてから事務局に電話するとその巡検はとりやめになったからウェールズの巡検にゆけという。は

じめてのイギリスで、ともかく汽車とタクシーで指定された目的地まで行って、すでに到着していた一行にあえた時にはほっとした。そこで唯一の日本人、小疇 尚さんを見つけた。

この巡検ではウェールズでの氷河地形を主とした巡検でそれなりに楽しんだが二つの思い出がある。一つは巡検の行程がきわめてタイトで、たえず時間に追いまくられていたこと、質問の時間さえとれない。ある地点につくと、ここをでるのは15分後、などときびしく時間が制限された。その後いろいろの巡検に参加したが、これほど時間におわれた巡検はない。それ以来私が国内や国際会議の巡検を実施した場合には、かならずある程度の時間のゆとりをとるようにした。もう一つは参加者が英語を話す人ばかりで（この時とは限らないが）、非英語民族は日本人2人、ポーランド人1人、フランス人1人で、食事時にはなんとなく一緒になることが多かった。このフランス人はチリやチュニジアの海岸地形研究で知名なパスコフ Roland Paskoff で、これ以降さまざまな国際会議で一緒になって親交を深め、ついにはチュニジアに招待されて第四紀編年の模式地の一つをみせてもらうことになった。さらに科研費によるチリでの国際共同調査の実施にあたって多大な協力を得るなど、思いがけない副産物があった。国際会議の実施は容易ではない。しかし、会議や巡検をおして新たな交流の機会が得られる。私が INQUA の日本開催をずっと前から企画、実施に努力したのもこのような機会を多くの人にもってもらいたかったからである。ところでバーミンガムに着いて登録をしたときに、なんと私が申し込んだ本来の巡検は実施されたのだという。いろいろな連絡の不手際に唖然としたものだ。

1982年：だんだんと大きな大会ではなく、小規模なプロジェクトごとの国際会議やワークショップに参加する機会がふえてきた。とくに IGCP による海面変化と関連する長く続いたプロジェクト、また活断層や古地震と関係するプロジェクトの会議には招聘される機会も多くなり、巡検を含めた数十人から100人程度の会議への参加は、巡検を主とし、また実質的な討議ができる実り多いものとなった。しかし、第四紀研究者が一堂に会し、分野を異にする研究の第一線の研究に触れることができる大会はやはり大きな意義がある。横道にそれだが、まだソビエト連邦であったころの1982年のモスクーでの大会でも、私にとってきわめて印象に残る第四紀編年に関する面白い発表があったのが忘れ難い。しかし、会議前に実施された黒海沿岸の巡検は IGCP との共催で、黒海北岸のスフミという場所に1週間の連泊であった。毎日同じ場所に泊まって同じ北側の海岸の往復をするので、連日同じ場所をとおる、単調であった。参加者はバス、案内者は別の車なので、長い道中眼に触れる地形の説明もなく、質問のしようもない。特定の場所でバスをおりて案内者の説明があるが、英語がわかりにくく、十分な質疑ができず、不満が鬱積した巡検であった。会議の面白さは巡検の成功と関係することを強く感じた。会議の準備

も十分とはいえ、突然半日分の座長をたのまれ、発表者の多くはロシア人でロシア語でしゃべるので、座長としてはタイムキーパーの役割しかできず、これも辛い経験であった。

この会議では貝塚さんが学術会議から派遣された日本の代表であったが、私も IGCP 関係から学術会議からの派遣者となり、発言権はないが[1国一人に限られる]国際評議員会なるものに出席することになった。このような会議に出席したのは初めてで、会議の運営そのほかに興味をもった。その時の INQUA の会長がニュージーランド、カンタブリー大学の地形学教授のまだ中年のスーン Jane Soon で（1973年の国際会議の委員長）、委員長に女性が選出されているのも当時の日本人として新鮮で、また国際評議員会での颯爽とした司会ぶりが強く印象にのこった。

1987年：この大会はカナダのオタワで実施された。会議前にノバスコシア半島からカナダ、アメリカの国境を越える IGCP と共催の巡検があり、会議後にはニューファンドランドの巡検があった。計1か月にわたる普段なじみのない地形であるので両方ともに参加した。これらの巡検は、いずれも厚い氷床に覆われた地域でのアイソスタティックな隆起の場所をみるのが目的であった。学生時代にスカンジナビアのアイソスタティックな隆起の論文を面白く読んで以来（今と違ってなんと限られた情報しかなかったことか）一度は見たい現象の一つであったから、これら二つの巡検には迷いなく参加した。そこで見たことの一つは氷床融解後のリバウンドのために三角州が隆起し、頂置層と前置層、底置層との関係が一つの露頭で明瞭にみえたことである。教科書では当たり前にかいてある三角州の内部構造を直接見たのは初めてで（恥ずかしいが本当の話）あり、おおいに感銘を受けた。ところで、会議と直接関係する巡検の際には、夕食の場所が用意されていることが多いが、この年の会議前の巡検の半分は何の用意もない。夜宿泊地について、はじめての町で、しかも町の中心からかなり離れた宿舎にとまり、それから夕食の場所をさがすというのはけっこう大変であった。これも旅の思い出で、情報に満ち溢れている現在では問題にもならないが。

このときの会議で私はニュージーランド北島東岸の海岸地域の地震隆起に関するポスター発表を行った。このときに私に熱心に質問をくれた人があり、それが USGS のネルソン Alan Nelson である。私のポスターについての長時間の議論のあとで、彼のポスターをみた。地震性沈降に関するもので、これは後に1700年のカスケード地震の発見につながる。このときは計2時間も二つのポスターを前にして議論が弾み本当に刺激を受けた。アランの紹介で目下古津波研究の世界的第一人者となっている USGS のアットウォーター Brain Atwater とも出会い、お二人を含めた科研費による国際共同調査を後に実施した。ポスターでの発表と議論が次の新たな仕事への出発点になった。

この時の会議後の懇親会の席で前記したブルームから、「パプアニューギニアの国際共同調査を計

画し、チャペル John Chappell (パプアニューギニアのサンゴ礁段丘からみた海面変化と地殻変動の研究で世界的に有名)もそれを受け入れているので参加しないか」と誘ってくれた。パプアニューギニアのヒュオン半島はサンゴ礁段丘と海面変化研究の聖地である。私は夢かとばかり嬉しく、経費のことも現地のきびしい状況も考えずに参加の意思を即答した。幸い、帰国後福武財団の研究費を受けることができた、1988年に実施されたこの国際調査は、マラリア蚊のいる熱帯で、テントに男性と一緒に1か月近くも過ごすというきびしい条件であったが、ここでジョンと出会い、サンゴ礁段丘の種々の側面を調査できたのはすばらしい経験であった。はじめどんな内容の研究が新たにできるか不安であったが、日本やニュージーランドでの経験を生かし、完新世の地震隆起を見出した。次いで実施された国際共同調査では、さらに研究地域を広げ、また5万年前までにさかのぼる地震隆起を確認し、さらに古ランドスライドの研究や、完新世の海面変化とサンゴ礁の関係など、いくつかの新たな成果をえることができた。日本ではとく性差別を感じる人が多い中で、女性であることを全く考えずに私を誘い、受け入れてくれたことは本当に嬉しいことだった。さらにすでに研究していた地域に国際調査のグループを喜んで受け入れるジョンの度量の広さに感銘した。私は、日本でもアメリカでも「ここは自分の縄張り」と称する人たちからいやな思いをしたことがあるので、ひとしお感激した。この1988年の調査の総括のために翌年に喜界島でワークショップを実施し、さらにそれがもとで、この世界的な場所で私がリーダーとなって次の国際共同調査を実施することになった。この会議での出会いが二つの新しい研究へつながることになった。

1991年：北京でアジアで初めてのINQUA大会がおこなわれた。このときは日本学術会議から派遣された日本の代表として参加したので、国際評議員会の出席が3回以上、しかも長時間にわたり、夜9時まで続くこともあった。したがって研究発表をおちついていく時間もなかった。国際評議員会では必要な書類も配布されず、準備が悪いが目立った。この会議で辛かったのはカテゴリの変更、つまり分担金変更の提案である。日本を最高のカテゴリに変更する提案がされ、挙手による採決の結果、私一人が反対で、ほかの国は自分のふところが痛むわけではないから全員賛成となった。その中で一人反対するのはなかなか勇気があることだった。この会議の後で、オーストラリアの代表から、一人で反対した勇気をほめられた。さいわい分担金の格上げは日本学術会議で認めてくれたが、それ以来日本はこれだけの義務をおったのだから、日本でも国際会議を主催し、また諸研究委員会での活動の中で、アジアのかたすみとしか認められていなかった日本の研究を国際的にする場の一つとして日本での開催を強く望む様になり、だいぶ以前から第四紀研連などを通して開催に模索を続けた。紆余曲折を経てその提案が受け入れられるには時間がかかったが、今こうして次回大

会の日本開催が決まり、立場を異にする方々が協力してその実施にあたっていることは嬉しいことである。遠い道のりであった。

1995年：この時の大会はベルリンで行われ、東西のドイツが統一された後でのドイツ開催であった。会場の施設が悪く、冷房もきかず、会場で窓を開けると風でスクリーンがハタハタと動き、図がみえにくく、また暑くても飲み水も得られないなど、会場としては十分な施設であったとはいえない。この時は夫の病気療養中であったため、1週間たらずの本会議のみの参加で帰国した。

この会議で私は日本学術会議から推薦され、INQUAの副委員長として立候補した。日本学術会議の第四紀研究連絡委員会で、日本人を役員に推薦するかどうかが議論になった時、私は推薦すべきであると主張した。国際組織の中で発言権をもつことが必要と思ったからである。議論の結果、日本から副会長を候補者に推薦することを決定し、当時研連の委員長であった私が候補者となった。ベルリンの会議では、推薦されたからには当選したいと思い、各国代表になっている人たちのうちで知っている人々には直接支持のお願いをした。これもなかなか勇気のいることであった。幸い国際評議員会で当選し、当時の日本代表であった米倉さんから「お日出とう」の挨拶を受け、また海外の知人からも次々と挨拶をいただいて、嬉しかったとともに責任の重さを感じた。そして執行部の中で私に何ができるか真剣に考えた。考えたことの一つはアジアの参加国をふやすことであった。

1999年：この大会は南アフリカのダーバンで実施された。執行部の会合が前年にもダーバンで行われたから、2回目の南アフリカ行きとなった。この時には執行部の役員として国際評議員会での資料作り(なんと資料のプリントまで地下の店まで走り回らなければならなかったのである)、4名の副委員長が責任をもつ複数の研究委員会の委員長との面談(過去4年間の活動の総括など)で忙しく、発表をあまりきけなかった。

執行部の一人として印象に残るのは台湾の加盟である。上記のように、副会長に就任して以来私はアジアからの加盟国をふやしたいと念じてきた。インドネシア、タイなども友人をとおして加入の依頼を続けたが、第四紀研究者の数が少なく、責任母体がないこと、分担金の負担がしにくいことなどから、加入の申し出が得られなかった。唯一台湾のみが加入の意思を示し、正式な申し入れを受けた。このことが国際評議員会での正式な議事になる以前に、中国代表から執行委員会に台湾加入に反対の意思表示があり、国際評議員会でも中国代表からの「二つの中国」に反対の強い意思表示があった。無記名投票の結果、反対票2つで台湾からの加盟は認められた。中国以外のどこの国が反対票を投じたか興味があったがもちろんわからない。ところで台湾の加盟を解決する際に執行部が考えたのは、加盟団体を“国”だけにするのではなく、ある地域を参加母体にするという方法であった。だから台湾は中華民国としてではなく、台北地域の第四紀研究者を母体とする形で加盟す

ることになった。これも一つの便法で、実質的に台湾が加盟したことにかわりはない。このような方法がほかの地域にも適用できる可能性を考えていたのだが、その後、南アメリカでいくつかの国が集まって「South America」として参加しており、趣旨が生かされている。

執行委員会は任期中毎年数日にわたって行われたから互いに親しくなった。なんとメンバーの大部分が猫ずきで、執行委員会のニックネームをキャットクラブとしようかという冗談も出た。当時の執行部のメンバーのうちで、レス研究をはじめとする第四紀研究の大長老の劉東生、これも世界的な学者のシャクルトン Nick Schakleton などが世を去られた。哀悼の念にたえない。

台湾加盟にもどらう。台湾加入の実質的な仕事とし、INQUA の研究委員会による小規模な国際会議を台湾で開きたいと考え、しばしば INQUA 大会に参加した台湾大学の劉平妹によびかけた。彼女の努力で、INQUA のネオテクと海岸線の両研究委員会の主催で、台湾の国家科学委員会の協力を得て、2 日間の発表、それに続く 3 日間の巡検を実施した。約十か国からの参加者を得、研究発表は Quaternary International の特集号として 2004 年に刊行された。次回の日本での大会実施に当たっては台湾での巡検も企画されており（台湾大学の活断層、層序学などの研究で著名な陳文山が案内者となる）、台湾の加盟による国際協力が実を結びつつある。

ダーバンでの国際評議員会で印象に残ったのは、同会に出席している各国代表の約 3 分の 1 が女性であったことである。ある苦い経験がある。かつて日本学術会議で、第 4 部（理学系）の研連の委員長会議があった。その時に 60 近い研連の委員長のうちで女性が私一人であった。私は、某氏にこれが異常ではないかとささやいた。その方はこのような事態をなぜ異常と思うかわからなかった。今は男女格差が是正されつつあり、男性から逆差別があるとさえいわれることもあるが、本質的にはどうであろうか？少なくとも当時は日本の現状は世界からみて異常であったのである。

2003 年：アメリカ合州国レノで開催された。アメリカでの 2 回目の大会である。宿泊するホテルが会場で、便利はよかったが終日同じ建物にこもることになった。この時の大会では、日本開催を目指して多くの人が努力し、入念に準備して提案したにもかかわらず、急に浮上したオーストラリアでの開催が決まった。なぜ、というプロセスはわからないが、長い間の努力が一蹴されたのは何と云ってもこたえた。「次の次をねらう」ということで残念会が終わったが、本当に後味がわるかった。

2007 年：オーストラリアのケアンズでの大会である。なんとなく、複雑な気持ちで迎えたこの大会であったが、もちろん会議が始まればいい天候とよく整えられた会場でそれなりに会議を楽しんだ。世界的な観光地といっても、それほど人のにぎわいもなく、ホテルと会場とは適当な距離で南半球の夏を堪能した。この大会の委員長はチャペルであった。私は、彼がその職責上から会議期

間中は忙しくて個人的な話をする時間などないと思っていたが、彼は、「会が始まればすべて役割分担に従って運営されるから委員長はすることがない」、といってほとんど連日夕食をともにして仕事のまとめなどを話し合った。得難い時間をともにした数日でもあった。

2011 年：美しいアルプスの山に囲まれたベルンで行われた。この時は滞在中の台湾から出かけた長い道のりであった。ベルンの大会は出足がおそかったようであるが、実際には風景の魅力もあって今までにない数の参加者を得、日本からも多くの参加者があった。日本の第四紀学会ではみない方を国際会議の大会で御見かけするようになったのは最近の傾向である。会場付近の風景のよさはよしあしで、つい散歩への誘惑にかられる。私も時に会議を抜け出してベルンの町の散歩を楽しんだ。暑い名古屋ではこのようなことは起こらないかもわからない。

この大会で私は口頭発表のほかに台湾の古津波に関するポスター発表をした。その隣が旧知のオーストラリアのゴフ James Goff で、ここでも両方の図に基づいて話が盛り上がった。彼の夫人はやはり古津波の研究者で、その後メールでの交流が続き、私が 5 月に台湾で発表する予定の PPT を送ったら、それについての丁寧なコメント、および今後すべきことについて示唆に富む文章をおくってくれた。このポスター会場で、横浜国大の卒業生であった相馬秀廣さんから乾燥地での面白い着眼点の研究成果をたっぷりときいたが、その翌年に彼は二度と帰らぬ旅路に発たれたのであった。辛い思い出である。

この大会での最大の結果は、日本招致が決定したことである。はじめて日本開催を模索し始めて以来何年たったことであろう。提案を始めた時には（もう 20 年以上も前、その頃の経緯を知る人も少なくなった）国際学会を実施して何のメリットがある、若い人の負担が増えるばかり、資金のめどもたたないのに無謀、などさんざんに批判されたものであったが、今や第四紀研究者が一丸となってこの大会を迎えることになった。直接準備に当たる方々の大変な努力はまさにこれからであるが、そして大変な負担になることは分かっているが、懸案の日本開催が実りあることを心から願っている。私も学会の会員としてできる仕事を果たしたいと思っている。

個人的に嬉しかったのは、この会議で名誉会員として推薦されたことである。今回名誉会員に推薦されたのは 8 名で、その中には親友のチャペル、前の会長であったポーター Steve Porter も入っていた。そういえばポーターは写真の名手で、2003 年の大会で、INQUA の歴史を話した時、著名な第四紀研究者たちの写真をスライドにして次々とみせ、論文だけでしか知らなかった科学者の風貌をみる機会を与えてくれた。日本人としては琵琶湖の研究で知られる堀江正二さんが含まれていたように記憶している。これも一つの科学史でのアーカイブの方法であると面白く思った。ところで、私が名誉会員に推薦されたことを現在の所属先で

ある国立台湾大学の陳宇高教授に報告した。彼はこの推薦を大変喜んでくれ、台湾大学のニュースレターにその記事をのせてくれ、それを見て台湾大の何人かの人から御祝いの言葉をうけた。そして、スイスへの旅費が自弁であることを知り、なんと旅費を全部台湾大学から支出してくれることになった。一時的な勤務先である台湾大学で自分の本国よりもこの名誉を形に表して喜んでくれたことは感激であり、かつ複雑な気持ちである。

3. 結び

手元に何の資料もないままに書き綴ってきた。まだかきたいこともあるが、そして載せたい写真も多数思い浮かぶのであるが、何分にも手元にない。まったく個人的な随想になったことを改めておわびするとともに、2015年の名古屋での大会が、日本人研究者の一丸となった協力によって素晴らしいものであることを願い、その一部に協力できることを願ってこの回想を終わりとす。

◆清水恵助先生のご逝去を悼む

陶野郁雄

大学生の時から日本第四紀学地質分野の会員であった清水恵助先生が本年2月22日に就下性肺炎のため、ご逝去されました。享年72歳でした。謹んでご冥福をお祈り致します。

先生は1940年5月に山形県上市市で生まれ、1964年に山形大学文理学部理学科地質鉱物学専攻を卒業され、同年東京都港湾局に就職されました。入局後一貫して東京港付近の深部地下地質に関する第四紀学的・地質学的研究、および沖積層地盤・埋立地盤・廃棄物地盤の地盤工学的・応用地質学的研究をなされ、1985年に東京工業大学から工学博士号を授与されました。そして、1998年に九州工業大学工学部建設社会工学科教授に就任され、2004年に定年退職されました。

埋立地盤などの人工地盤を第五紀層と名付け、都市地質学の第一人者として第四紀学会、地盤工学会、地質学会などで活躍されてきました。東京港地盤図の編集・刊行に関わられてきました。デジタルブック最新第四紀学ではヒューマンインパクトの中で東京の都市地質を書かれています。その中で、都市域における地質学的課題を研究する地質学の一分野として都市地質学を再定義され、研究の集大成をなされていると思います。

また、先生は若いときからクラシック音楽に興味を持っておられました。しかし、ピアノ演奏発表会で奥様と連弾をなされるときは、いつものジョークが影を潜め、広い額に玉の汗を流されながら演奏をされるという一面を垣間見ることができました。

2000年に噴火が始まった三宅島火山災害に関する地盤工学会の研究委員長としてご尽力されている最中の2007年7月に突然病に倒れました。自宅のすぐ近くに研究拠点を設けたにもかかわらず、中断せざるを得なくなったことが残念でたまりません。リハビリの甲斐もなく旅立たれました。先生のご冥福をあらためてお祈り申し上げます。



◆新潟大学教育研究院自然科学系教員公募要項

1. 所 属 新潟大学教育研究院自然科学系 環境科学系列
2. 担当学部・研究科 理学部 地質科学科 大学院自然科学研究科 環境科学専攻 地球科学コース
3. 担当予定科目 学 部：岩石・鉱物学、構造地質学、堆積・古生物学に関する何れかの専門科目、野外調査を基本とする実習科目、地学に関する基礎科目
大学院：地圏環境進化学に関わる地質科学分野の専門科目 など
4. 職種・人員 准教授 1名
5. 採用予定日 平成25年12月1日以降のなるべく早い時期
6. 給 与 国立大学法人新潟大学職員給与規程による
7. 職務内容・条件
 - (1) 理学部地質科学科及び大学院自然科学研究科環境科学専攻地球科学コースの教育目標と教育内容、伝統を理解し、野外調査を基本とする地質科学の教育及び研究に情熱を持って取り組むこと。
 - (2) 野外実習を含む地質科学の基礎科目の教育を行うこと。
 - (3) 新潟大学自然科学系附置コア・ステーション「地球環境・地球物質研究センター」の活動に参画すること。
 - (4) 日本技術者教育認定機構（JABEE）に認定されている教育プログラムに参画すること。
8. 応募資格

- (1) 博士の学位を有すること。
 - (2) 上記職務内容に関して優れた教育研究業績を有し、地質科学分野の教員と協力して教育研究を担える能力と熱意があること。
9. 応募書類 (各 1 部)
- (1) 履歴書 (写真を貼付し、連絡先の電話番号と電子メールアドレスを明記のこと。書式は自由)
 - (2) 著書、学術論文 (学位論文、レフェリー付きの原著論文、総説に区分) 及びその他の論文 (レフェリーなしの原著論文、国際会議発表論文など) を分けた研究業績のリスト。それぞれに、著者名、論文名、雑誌名、巻、最初と最後のページ、発表年 (西暦) を記載し、Science Citation Index に登録されている雑誌には、リストの番号にマーク (*) を付けること。
 - (3) レフェリー付きの原著論文のうち、代表的なもの 10 編以内の別刷あるいはコピー。
 - (4) これまでの研究と教育についての概要と採用された場合の研究と教育についての抱負を 2000 字程度にまとめた文書。
 - (5) 過去 10 年間における、科研費等の外部資金の獲得状況 (代表者、分担者の区別および課題名を明記すること)、特許、受賞、社会的活動状況をまとめた文書。
 - (6) 応募者について意見を聞くことのできる方 2 名の氏名と連絡先 (勤務先、電話番号、電子メールアドレス)。
- (注) 応募書類の形式は自由です。応募書類は選考以外の目的には使用しません。応募に関する秘密は厳守します。本公募手続きにより本学が取得した応募者の個人情報、「独立行政法人等の所有する個人情報の保護に関する法律」に基づいて適正に管理します。また、上記の応募書類は返却しません。
10. 応募の締切 平成 25 年 8 月 16 日 (金) 必着
11. 選考方法 応募書類による選考を行います。面接による最終選考を行うことがあります。ただし、旅費は支給しません。新潟大学では、男女共同参画推進室を設置し、女性研究者支援を推進しています。女性研究者の積極的な応募を歓迎します。(男女共同参画推進室：<http://www.niigata-u.ac.jp/geo/>)
12. 提出書類の送付及び問合せ先
- (1) 送付先 〒 950-2181 新潟市西区五十嵐二の町 8050 番地
新潟大学自然科学系総務課学系庶務係
(封筒の表に「教員応募書類(地圏環境進化学分野准教授)在中」と朱書きし、簡易書留で送付のこと。)
 - (2) 問合せ先 〒 950-2181 新潟市西区五十嵐二の町 8050 番地
新潟大学理学部地質科学科 教授 サティッシュ クマール
電話 025-262-6327 (直通) E-mail: [satish\(at\)geo.sc.niigata-u.ac.jp](mailto:satish(at)geo.sc.niigata-u.ac.jp)
 - (3) 担当予定学部・研究科の活動内容については、以下のホームページを参考のこと。
新潟大学理学部地質科学科 (<http://geo.sc.niigata-u.ac.jp/index.html>)
新潟大学大学院自然科学研究科 (<http://www.gs.niigata-u.ac.jp/~gsweb/index.html>)
新潟大学地球環境・地球物質研究センター (<http://geo.sc.niigata-u.ac.jp/~ceems/>)

◆日本第四紀学会 2012 年度第 5 回幹事会議事録

日 時：2013 年 5 月 12 日 (日) 10:00 ~ 16:00
場 所：早稲田大学教育学部 1029 会議室

出席者：遠藤、竹村、久保、植木、須貝、長橋、水野、奥村 (学術会議)、中野 (事務局)

<報告事項>

- 1) 学会への配布物 13 件。
- 2) 選挙管理委員会報告：3 月 20 日 (水) に明治大学駿河台キャンパスにて第 1 回委員会を開催し、中島委員長を選出、選挙日程を以下のように決定した。4/15 評議員選挙用紙発送、5/23 評議員選挙締切、5/25 第 2 回委員会 (評議員選挙開票)、5/27 評議員の委嘱状発送、6/3 役員選挙用紙発送、6/20 役員選挙締切、6/22 第 3 回委員会 (役員選挙開票答申作成)、6/24 新役員へ委嘱状発送。会則に基づき被選挙人名簿を確認するとともに、役員選挙規定に基づき分野別評議員数を決定した。
- 3) 会費長期滞納者については再度請求を行い、7 月末までに納入されない場合、8 月の評議員会にて除籍を決定することとした。

4) 転載許可申請が 1 件あり (第四紀研究 44 巻 229-245 の表 1 を転載)、これを許可した。

5) 地球惑星科学連合報告：オープンアクセス電子ジャーナルが 'Progress in Earth and Planetary Science' に決まり、組織を立ち上げるために幹事会が作られた。

6) 特別講演会「自然環境の過去・現在から未来を見据える：環境と自然災害」を 6 月 22 日 (土) に大阪大学豊中キャンパスにて実施し、2011 年・2012 年学術賞受賞者講演のほか、都司嘉宣氏による南海地震に関する特別講演を行うことを決めた。

7) 2013 年弘前大会 (8 月 22 日 ~ 24 日) の参加費・懇親会費、公開シンポジウム「考古遺跡からみた津軽の人と自然」のプログラム、巡検「津軽平野とその周辺域の第四紀地形・地質と縄文遺跡」(8 月 25 日) の詳細などを決め、第四紀通信 20 巻 3 号に投稿した。

8) 編集委員会報告：第四紀研究 52 巻 1、2 号を刊行し、第 3 号校正中。編集委員会は 2 月 2 日、

4月6日に開催した。手持ち原稿は、論説9編、短報1編。立正大学大会特集号(第4号)は7編。第1号から4号分まで編集書記サポート代を支払う。受理後に提出する電子データの形式・解像度・フォント・カラー画像などについてまとめたものを、第四紀通信20巻3号に掲載する。

9) 学術会議報告：平成27年度共同主催候補に国際第四紀学連合第19回大会が決定。平成25年度代表派遣では、第1回国際層序学会(リスボン、7月)に奥村晃史会員の派遣決定。1月31日に提言「地質地盤情報の共有化に向けて—安全・安心な社会構築のための地質地盤情報に関する法整備—」を公開した。参照基準「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準：地球惑星科学分野」を作成中であり、6月16日に東大地震研にてシンポジウムを開催する。

10) 国際第四紀学連合第19回大会組織委員会報告：4月7日に首都大学東京秋葉原サテライト会議室で幹事会を開催し、INQUA執行委員会の指摘への対応を行い、テーマ名の語句修正、基調講演スピーカー選出方法、セッション公募方法とスケジュール、予算・登録料などについて審議した。関連学会への協力依頼文を作成し、発送した。日本政府観光局助成金制度に採択され、募金活動を開始した。

11) INQUA執行委員会が3月5～9日、Caracas, Venezuelaで開催された。IFGのプロジェクトなどに対して今年度は約10万ユーロ採択、完新世の区分について(Anthropoceneの問題、前期・中期・後期の細分など)の話題。INQUA Early Career Researcher Inter-congress Meeting, Wollongong, Australiaが12月2日～6日開催される。

<審議事項>

1) 日本活断層学会主催の「深谷断層見学会」(6月9日)について古地震・ネオテクトニクス研究委員会との共催依頼があり、承認した。

◆ 2012年度第3回評議員会議事録

日時：2013年5月23日(木) 18:30～20:00
場所：幕張メッセ国際会議場 会議室202

出席者：遠藤邦彦(会長)、吾妻 崇、阿部彩子、池原 研、植木岳雪、岡崎浩子、奥村晃史、小野 昭、北村晃寿、久保純子、斎藤文紀、須貝俊彦、中村俊夫、中村由克、兵頭政幸、藤原 治、三浦英樹、水野清秀、三田村宗樹、百原 新(以上、評議員)、卜部厚志(論文賞選考委員長)

久保幹事長の司会のもと、遠藤会長の挨拶に続き、議長に三浦英樹評議員が選出された。定足数確認(出席19名、委任状18通)後、下記の審議と報告が行われた。

<審議事項>

1) 2013年日本第四紀学会論文賞・奨励賞の受賞者・受賞論文の決定

論文賞受賞者選考委員会の卜部委員長より、締切日までに1件の論文賞の推薦があったこと、論文賞は独創性・総合性・発展性を重視し、奨励賞については独創性と将来性を重視したこと、選考

2) 2013年京都国際地理学会議において第四紀学会へ展示ブースへの出展依頼があり、協力することにした。

3) 第四紀研究投稿規定について、総説・論説・講座のページ数を増やすこと、超過ページの著者負担を1ページにつき10,000円とすること、論文を補足する「オープンファイル(その後電子付録と改名)」をホームページに掲載できることを追加する、改訂提案を議論し、電子付録掲載要項を後日整えることで、まず次回評議員会に提案することにした。

4) 2013年功労賞候補者について議論し、来年度に名誉会員候補者の推薦が検討されることとあわせて、功労賞の選考も来年度に持ち越すことにし、評議員会の了承を得ることにした。

5) 第四紀研究と第四紀通信の統合案について議論を行い、トピック的な内容が掲載できるなどの利点がある一方、編集が大変であること、第四紀通信を紙にする必要があるかなどの意見が出され、幹事会でさらに検討することとした。

6) 第四紀研究の編集方針のほか、運営体制、役員選挙方法、各種顕彰方法、規約類などの再検討、学会の方向性などについて提言を行う将来検討委員会を立ち上げることについて意見交換を行い、次回再度議論することにした。

7) 豊中市での露頭保存に関する要望書提出の依頼に対して議論を行い、経緯に詳しい竹村副会長が回答文案を作成することにした。

8) INQUA2015名古屋大会の記念出版物について、日本第四紀地図の改訂案が出され、意見交換を行った。出版社へ問い合わせるなど関係者から情報を集めたうえで、次期幹事会へ申し送ることとした。

9) 外部機関から学会に対し委員候補者などの推薦依頼があった場合に生じる問題点について、意見を交換した。

委員の論文が対象となった場合には、その選考委員はその審議には関与しなかったことなど、選考経過報告がなされた。また、論文賞候補2論文、奨励賞候補者2名について、その推薦理由とともに説明がなされ、審議の結果、論文賞2件、奨励賞2名が決定した(受賞者・受賞論文は本号の関連記事参照)。

2) 2013年日本第四紀学会学会賞・学術賞受賞者の決定

学会賞受賞者選考委員会の百原委員長より、締切日までに学会賞の推薦3件、学術賞の推薦3件があったことなど、選考経過について報告がなされた。また、学会賞候補者3名、学術賞候補者2名を推薦することとその理由について説明がなされた。審議の結果、学会賞3名、学術賞2名の受賞が決定した(受賞者は本号の関連記事参照)。

3) 第四紀研究投稿規定の改訂について

幹事会(編集幹事)より、第四紀研究投稿規定の一部改訂に関する提案があり、審議が行われ

た。総説のページ制限を刷り上がり 18 ページ以内、論説・講座は 16 ページ以内と長くすること、制限ページ超過分の著者負担を 1 ページ当たり 10,000 円に引き下げる提案があり、承認された。また、原稿を補足する内容の電子付録を第四紀学会ホームページに掲載できるとする電子付録の項を追加する提案が出されたが、まだその詳細を定める「電子付録掲載要項」が作成されていないこともあり、その要項と合わせて次期評議員会にて再度審議することとなった。

<報告事項>

1) 功労賞選定の次年度持ち越しについて

日本第四紀学会功労賞の選考は原則として 2 年に 1 度行われ、当年度はその選考年にあたっているが、次年度の名誉会員の選考とタイミングを合わせたいという方針が幹事会より示され、了承された。

2) 国際第四紀学連合第 19 回大会組織委員会報告

斎藤文紀委員長より、これまでの組織委員会の活動報告が行われた。INQUA 執行部会において指

摘された要望への対応、セッション提案のルール決め、各受付のスケジュール、参加者が多く見込まれる巡検の検討、学協会への共催依頼の回答状況、第四紀学会大会に向けての作業内容の確認、JNTO の寄付金交付金制度を利用した募金活動の進捗、学術会議共同主催国際会議候補に決定したこととその最終申請書類の準備などについて報告された。

3) 地球惑星科学連合関連報告

遠藤会長及び担当幹事より以下の報告がなされた。次年度連合大会は 4 月 28 日～5 月 2 日に横浜市のパシフィコ横浜会議センターで開催される。これに伴い参加費が上がる。次々年度は幕張に戻るが、さらに将来については次年度大会後のアンケートによって横浜か幕張かが決定される方針である。同連合が出版するオープンアクセス電子ジャーナルの名前が 'Progress in Earth and Planetary Science' と決まり、申請していた科研費（海外情報発信強化）も採択された。編集体制を整え、2014 年 1 月出版開始予定である。

★★★ 第四紀通信に情報をお寄せ下さい ★★★

第四紀通信の原稿は随時受け付けております。

広報幹事：兵頭政幸 (mhyodo(at)kobe-u.ac.jp) 宛にメールでお送り下さい。

第四紀通信は奇数月月上旬原稿締め切り、偶数月 1 日刊行予定としていますが、情報の速報性ということから、版下が出来た段階でホームページに掲載するよう努力しています。奇数月 15 日頃にはホームページにアップするようにしていますのでご利用下さい。

日本第四紀学会広報委員会 神戸大学 内海域環境教育研究センター 兵頭政幸
〒657-8501 神戸市灘区六甲台町 1-1 FAX: 078-803-5757

広報委員：糸田千鶴 編集書記：岩本容子

日本第四紀学会ホームページ <http://quaternary.jp/> から第四紀通信バックナンバーの PDF ファイルを閲覧できます。

日本第四紀学会事務局

〒169-0072 東京都新宿区大久保 2 丁目 4 番地 12 号 新宿ラムダックスビル 10 階
株式会社春恒社 学会事業部内

E-mail: daiyonki(at)shunkosha.com 電話: 03-5291-6231 FAX: 03-5291-2176